

高い香りの沈丁花。梅と桜の間に春の訪れを感じさせてくれます。春一番、春雷にお水取り。寒い日があっても、春を意識する日が続きます。

現在会員登録数 4,041 人さま。次号は 4 月 20 日発行の予定です／

十----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----十

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

十-----十

■-----■  
【1】お知らせ

● 講演と対談「日本児童文学が宮沢賢治から受け取ったもの」

日時：3月21日（火・祝）13：30～16：15

講師：富安陽子（童話作家）、宮川健郎、大島丈志、遠藤純（宮沢賢治研究者）

場所：大阪府立中央図書館ライティホール 参加費：無料 定員：300人

主催：宮沢賢治学会イーハトヴセンター、日本児童文学学会関西例会、IICLO

詳細・申し込み→ <https://20230321kenji.peatix.com/>

● 国際講演会「日本の子どもの本に描かれる「西洋」のイメージ-石井桃子  
翻訳作品からはじめて-」

日時：3月25日（土）14：00～16：00

講師：ステーブン・チェ（児童文学研究者） 聞き手：土居安子（IICLO）

場所：大阪府立中央図書館 多目的室 参加費：無料 定員：50人

詳細・申し込み↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/02\\_lecture/index.html#050325](http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#050325)

● IICLO オンライン講座 I 「授業に役立つ！子どもの文学5つのレッスン」  
（全5回） ※3月31日まで配信中！

〔1〕宮沢賢治を読み直す①「注文の多い料理店」

〔2〕宮沢賢治を読み直す②「雪渡り」

〔3〕あまんきみこを読み直す①「白いぼうし」と「名前を見てちょうだい」

〔4〕あまんきみこを読み直す②「ちいちゃんのかげおくり」

〔5〕（特別編）「あまんきみこさんに聞く読むことの喜び」

視聴料：各回1300円、各回ごとにお申し込みください。

気になる回だけの視聴も可能。期間中は繰り返しご覧いただけます。

申し込み→ <https://iiclo.peatix.com/>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募ってい

ます。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

\* 年間 1 万円以上ご寄付いただいた方には、イイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

※詳細は → [http://www.iiclo.or.jp/donation\\_10th.html](http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html)

※Syncable → <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclo1196>

公開内容一覧は → [http://www.iiclo.or.jp/m1\\_youtube/index.html](http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html)

● 当財団公式 Twitter → [https://twitter.com/IICLO\\_News](https://twitter.com/IICLO_News)

■ ----- ■  
【 2 】 コラム  
■ ----- ■

◎ 宮川健郎理事長による連載「私の出会った児童文学者たち」を、次号から開始予定です。どうぞお楽しみに！

\*\*\*\*\*

《 1 》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

\*\*\*\*\*

『遊びは勉強 友だちは先生 「ズッコケ三人組」の作家・那須正幹大研究』  
藤田のぼる、宮川健郎、津久井恵、ポプラ社編集部/編 ポプラ社 2022年  
11月 対象年齢：大人

\* 今回のゲストは当財団の宮川健郎理事長（T）です。

概要：2021年7月に79歳の生涯を閉じられた那須正幹さんの追悼研究本。

第1章 那須正幹のことば、第2章 那須正幹が書いたこと（遊ぶ、追いつめる、探しだす、解きあかす、漕ぎだす、祈りつづける、迷いこむ、生きる①②）、第3章 「ズッコケ三人組」わたしのイチオシ この一冊、第4章 <座談会> 那須正幹さんとの本づくり、第5章 「ズッコケ三人組」シリーズと『絵で読む 広島原爆』をめぐる旅 平和の願いをつなぐ場所・つなぐ人～広島 2022・夏～、と「エッセイ 那須さんと私」「那須正幹さんへの手紙」からなる。

Y：とてもおもしろくて一気に読みました。那須さんのお人柄や、作品、平和に対する思いなどが語られてとても読みやすく、読物としておもしろさがありながら、その目次構成や書かれている内容には研究的な視点（注）があります。二つが両立している点が、作家の追悼本のありようの新しい1つのモデルのような気がしました。その目次内容は、タイトルにある、「遊びは勉強 友だちは先生」が、全体のテーマとして通っており、那須さんがいかに多くの人たちとつながっていたか、いかに読者を大切にしていたかが伝わってきます。

T：そんなふうにご読んでくださってうれしいです。僕は、第1章を担当しました。2022年の春に、編者3人で山口県的那須さんのお宅へうかがって、段ボール4箱の資料を東京へ送り、那須さんが書かれた雑誌のエッセイや新聞の切り抜きなどをすべて読みました。そして、そこから、那須さんの人生がたどれるように、那須さんのことばを選びました。那須さんは、10ぐらいの大切にしたいことを、繰り返しおっしゃっていると思いました。

Y：この本を編集するにあたって苦勞されたところはどこですか。

T：実務上の苦労はありましたが、精神的な面での苦労はまったくありませんでした。この本は、ポプラ社の編集者たちが、ぜひ、那須さんの追悼の本を作りたいと思ったところから始まり、原稿依頼をした人たちも、那須さんへの思いからそれぞれ思わぬ力を発揮してくださいました。たとえば、第5章を担当してくれた中澤晶子さんは、那須さんの作品の舞台をくまなく歩いて充実した内容にしてくださいました。

Y：聖地巡礼のようなガイドになっています(笑)。那須さんから中澤さんへ、平和に対する思いのバトンが手渡されているような気がしました。

この本を編集されていて、心に残ったことはありますか。

T：いろいろな方が那須さんの思い出を語ってくださったことです。コロナ禍で偲ぶ会を行いました、読者の方々にまではいらしていただけませんでした。この本が本当の意味での「偲ぶ会」だと思います。

Y：いろいろなご著書が紹介されていて、読み直したいなと思った本がたくさんありました。そういう意味でブックガイド的な側面もあります。

T：作品が読み継がれていく限り、作家は亡くなりません。この本をきっかけに、那須さんの作品を読み直したり、新しい読者が生まれたりすることを期待しています。

(注) ある意味で、『ズッコケ三人組の大研究』1、2、ファイナル 石井直人、宮川健郎/編 ポプラ社 1990年6月、2000年3月、2005年6月の続編ともいえる。

\*\*\*\*\*

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

第91回「みじかい木ペン」

試練の行方

キッコは、あまり小さいために級友たちの〈胆取りと巡査〉の遊びにも入らず、一人で机に座って、〈一寸ばかりの鉛筆を一生けん命にぎってひとりでにかかわらないながら8の字を横にたくさん書いて〉いました。すると慶助が来て、ふざけてキッコの木ペン(鉛筆)を取りあげ、なくしてしまいます。

学校が終わり、意気消沈したキッコが樺の林を歩いていると、〈灰いろのひだのたくさんあるぼろぼろの着物〉を着て、〈変な黒い沓〉をはいたおじいさんに出会います。キッコが学校での顛末を話すと、おじいさんは〈灰色でござそしておまけに心の色も黒でなくていかにも変な鉛筆〉をキッコに手渡してくれます。(心=芯)

次の日、算術の時間にその鉛筆を使うと、難しい計算でも鉛筆が勝手に動いて解いてしまいます。それどころか、文字を書いても絵を描いても、〈鉛筆はまだキッコが手もうごかさないうちにじつに早くじつに立派にそれを書いてしまう〉のです。

何でも一番にできるようになり、二学期には級長にもなったキッコ。しかし学力と権威を手に入れたキッコは威張りだし、周囲に対し自分勝手にわがままな態度をとるようになります。そんなある朝、キッコがあの鉛筆をなくしてしまいます。学校で算数の問題ができず、先生にあてられて答えられないシーンで物語は中断しています(末尾欠落)。

キッコがこののちどうなるのかはわかりませんが、主人公の慢心・過信がや

がて破滅に至るプロセスは、「貝の火」（本メルマガ NO.108 参照）など他の賢治童話にも共通してみられるものです（続橋達雄『『みじかい木ペン』を中心に』1964年）。雲雀を命がけで助けた子兎のホモイにせよ、あんまり小さく弱いと形容され、遊びに加われないキッコにせよ、力と権威を付与され驕り高ぶったのは本人ながら、転落を描く（あるいは予兆させる）のは実に容赦のない結末です。

ホモイには寄り添う父がいましたが、キッコにはいません。あの不可思議なおじいさんはなぜキッコに魔法の鉛筆を与えたのか。それが弱いキッコへの試練であったとしたら、この試練の行方はどうなっていたのか、何とも気になるところです。（ペ吉）

（本文の引用は、新潮文庫『宮沢賢治万華鏡』によりました。）

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 45

\*\*\*\*\*

「ふうん、じゃあきくけど、母さんは、ぼくが勉強して、いい学校にはいれば満足なの。それでりっぱな人間になったと思うわけ。」

ぼくのからだのなかに、だれかがダイナマイトを仕かけているんだ。いつ爆発するかわからないダイナマイトを……。

（『ぼくらは海へ』 那須正幹/著 安徳瑛/絵 偕成社 1980年1月上 p.184、下 p.231）

那須正幹の作品としては、「ズッコケ三人組」が最もよく知られていますが、2010年の文春文庫化にあたって、編集部のインタビュアーが「問題作にして“裏代表作”と呼びたい」（<https://books.bunshun.jp/articles/-/2919>、2023年3月13日閲覧）と言った『ぼくらは海へ』からの引用です。

主な登場人物は、同じ小学校の6年生男子7人。うめ立て地にある、使われていないプレハブ小屋に集まり、廃材などを使って船を作るという物語です。はじめは、同じ進学塾に通う誠史（さとし）、雅彰（まさふみ）、邦俊（くにとし）、勇（いさむ）の4人と、邦俊と同じクラスの嗣郎（しろろ）が集まっていますが、誠史たちが船を作っていることを知った学級委員の康彦と、康彦の友だちでちょっと乱暴なところのある茂男も船作りに参加するようになります。

上の引用は、父が病死し、母と祖母と暮らす誠史が、塾の成績が落ちたことを母親に責められたときに発することばで、下は、ずっと船作りをしないで小屋で大人の雑誌を読んだりしていた成績優秀な邦俊が、茂男に勝手に船に乗ったことを責められて、逆切れし、茂男にのみを持って向かっていったときの自分のありようを語った言葉です。邦俊の父は病院の事務局長で、看護婦（ママ）さんと浮気をしており、母はそのことを知りつつ、仲のいい夫婦を演じています。

このように、すべての登場人物が、心の闇を持ちつつ生活している様子は、今読んでもまったく古びていません。競輪に明け暮れる大工の父を持つ嗣郎が、船作りに夢中になる様子も現代の貧困問題と重なります。そして、この作品

がハッピーエンドではなく、誠史と邦俊が船に乗って行方不明になって終わっていること、つまり、結末が読者の解釈にゆだねられているところが、宮川健郎が「『ぼくらは海へ』が八〇年代児童文学のとびらをあけたのだ」（『ズッコケ三人組の大研究 那須正幹研究読本』 石井直人・宮川健郎/編 ポプラ社 1990年6月 p.96）と述べているとおり、先駆的な作品であったということが出来ます。（Ｙ）

\*\*\*\*\*

《４》 行って来ました！

\*\*\*\*\*

MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店で4月2日まで開催されている『ちきゅうパスポート』刊行記念原画展に行ってきました。国境のない国々を想像力で自由に行き来できる、地球上のみんなが手と手を結びあえる、ジャバラ絵本の形で、日本をはじめ、6カ国24人の絵本作家が、子どもたちへのメッセージとして描いた作品である『ちきゅうパスポート えほん作家から地球の子どもたちへ』（BL出版 2023年3月）の原画展で、すべての絵が展示されています。

発起人は、絵本作家の、あべ弘士さん、石川えりこさん、ささめやゆきさん、田島征三さんと、デザインを担当した高橋雅之さん（タカハシデザイン室）、そして編集を担当した、広松由希子さんです。

原画は、本の見開きより少しずつ大きくて、いろいろな手法の絵があって、迫力がああります。特に、子どもと動物が野原にいて、おひさまがのぼっている「はじまりの国」（松成真理子）は、色の美しさをより感じる事ができました。子どもたちが手をつないでいる目次ページの絵（ささめやゆき）もあり、文字が入っていないことで、黄色がめだって、あたたかい雰囲気より強く伝わりました。

よく見ると、手をつないでいる絵はたくさんあります。「国境のない国」（長谷川義史）では、いろいろな国の子どもたちが、「ちゃんぼんの国」（降矢なな）や「パンセの星国」（さかたきよこ）では、人間と動物が、「飛ぶ国」（きくちちき）では、鳥と人間が、手をつないでいます。踊っていたり、空を飛んでいたりといて、とても自由で楽しそうです。そのうえ、ページどうしもつながっています。

「生きる国」（加藤休ミ）や「花孔雀村」（スズキコージ）のように植物も描かれているものも、フライング・パチャ（ホジェル・メロ（ブラジル））のように、レース編みのようになっているものなど、いろいろな絵があって、「ノダム（むすびめの国）」（ロマナ・ロマニーシンとアンドリー・レシヴ（ウクライナ））のように、「これは何が描かれているのかな」とじっとみると、発見があったり、考えさせられたりする点も興味深いと思いました。

本には、本書の収益の一部を、ウクライナの子どもたちの支援のために寄付すると書かれており、私も一冊買って帰りました。（Ｋ）

MARUZEN&ジュンク堂書店

[https://honto.jp/store/news/detail\\_041000076756.html](https://honto.jp/store/news/detail_041000076756.html)

■ ————— ■

【３】全国のイベント紹介

● 和田誠展

会 期：3月24日(金)～5月7日(日) 月曜休館

場 所：岡山県立美術館 観覧料：有料、中学生以下無料

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『遊びは勉強 友だちは先生 「ズッコケ三人組」の作家・那須正幹大研究』をプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.151 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は4月10日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

先日、児童福祉施設でのおはなし会に参加しました。ボランティアや財団スタッフによるおはなしや絵本がはじまると、小学生たちはずっとおはなしの世界に入り込み、私も思わず引き込まれました。最後にみんなで「ソーマトロープ」(残像効果により回転させた二つの絵が一つに見える)を作成し、子どもたちと一緒に楽しいひとときを過ごしました。当財団の大切な事業のひとつです。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/m1\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html) パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp